

## 関の歌：文苑

著者	錨山人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 7
ページ	9 8 - 1 0 1
発行年	1900-02-28
その他の言語のタイトル	関の歌：文苑
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5497">http://hdl.handle.net/2298/5497</a>

千里が濱に風さむく、  
紅そむる夕空に  
名残をとめて日も入れば、  
下界はこむる夕烟  
森も流れもおぼろげに  
夢にも似たる景色かな。

明日はいづくに、しるらむ、  
ひらく、れ、る雲の波、  
尾の上をかすめ峰を、と、  
た、すむ我をもつ、み、つ、  
入日の名残、え、ば、と、め、て  
走るすがたも、れ、も、ま、る、や、

關の歌

豊後佐賀の關は、單に『關』とも云ふ。また『速吸の水門』の稱あり。晴昔神武天皇東征の途、親しく御船を寄せられて、珍彦を得玉ひま所。山水の景極めて明媚。

走、せ、行、く、雲、に、止、れ、ど、や、  
す、さ、ふ、嵐、に、ね、む、れ、ど、や、  
時、に、暮、鐘、の、一、ひ、い、き、  
か、す、け、く、よ、は、く、ま、た、遠、く  
『やすみ』の聲をつたへつゝ  
雲の底よりたぬぐに。

其たぬぐになる聲も  
雲井のよそにきこぬけむ、  
碧の空にねむりてま  
星は慈愛の笑深く  
さめままなざしかむばしく  
てりぬあらぶる火の山に。

(一)

雨のみ神や、わたるらむ。

こゝは、筑紫のはての浦、  
入江に、水もしづかなる。  
棕島見ゆる、彼方より。

瀬戸のあら海、はるくど、

沙路にきゆる、四國地の、  
伊豫の鵜山、末どはく、  
空にかゝれる虹の橋。

高嶋の邊に、雲わけば、

夕立ちめぐる、地蔵崎、  
いか釣るあまは、苦覆ひて、  
早瀬に、舟はながれつゝ。

立つ、か、白、木、の、山、な、る、し、

白、杵、の、海、も、露、れ、ゆ、け、ば、  
白、帆、に、浪、も、か、い、や、き、て、  
夕、日、は、紅、か、え、津、久、見、嶋、

下浦わたり、夜了へて、

はのく、白らむ、湊へゆ、  
あしたの舟の、沖どはく、  
八千嶋かけて、出るとき。

磯。よ。り。い。そ。に。あ。ま。の。兒。は、

沙。の。落。ち。ゆ。く。跡。逐。ひ。て、  
を。め。く。聲。音。も。勇。ま。え。く、  
貝。あ。さ。る。な。り。こ。ゝ。か。え。こ。

北。嶋。か。け。て。暮。れ。そ。め。つ。

帆。影。は。消。ゆ。る。う。す。墨。の、  
白。ケ。濱。べ。の。沙。際。に、  
夕。月。淡。は。く。落。つ。る。ど。き。

上。浦。町。に。酒。買。ひ。て、

今。歸。り。來。る。わ。ら。わ。べ。は、  
歌。も。い。と。し。き。一。節。に、  
松。あ。る。坂。を。越。え。て。ゆ。く。

小。黒。の。濱。の。月。の。夜。は、

妻もいざ來よ、兒もきたれ、  
松の木蔭に浦人の、  
まどろの興もつもりつゝい。

(二)

朝た登るや、牧の山、  
水も麗はし、山も善し、  
入江々々に船滿ちて、  
此所には、海の幸多し。

東の洋に、旭子の、

光も清く昇るとき、  
四方の海原、うらくと、  
速吸瀬戸に、浪も無き。

思ひは遠き、三千歳の、  
世は、まだ早き大八洲、  
豐葦原の、この國の、  
關らけそめにし其時よ。

名は、磐余彦神の子が、  
猛き、尊き、みてゝるに、

世の、草、昧を、ひら、かん、と、  
日向の宮を、かゝり、出して、

めぐる、浦々、いく、百、夜、  
征衣の袖も、沙、たれて、  
初め、て、出で、き、此所の、浦、  
君は、御軍、とめ、に、けむ。

音。  
美に、き、く、に、し、東、が、き、の、  
故郷、ど、ほ、く、隔、て、ゝ、は、  
なは、物、を、こ、そ、思、は、る、れ。

煙は迷ふ、南洋の、

黒き潮に、舟、うけて、  
あした、夕べに、鍛ひてし、  
腕の、ちからは、餘、る、とも。

天の逆鉾、ふと立て、

高千穂の根に、降り來、  
遠き、み祖父の、偉いなる、

み志をまねびては、

嗚呼、牧山に出でし月、

み船の窓ゆ、仰がれて、

尊き、たけき、みこゝろに、

何思ばまけむ、我君は。

流れも速き汐の上に、

深き思ひを、放ちては、

みとまの下に、賢くも、

君は泪をそゝぎけむ。

あゝ、關の山、聖き山、

その海原は、きよき海、

昔ながらの此浦は、

幸こそ、ことに多かれ。

## 答五弓進之書

山田 準

某白、進之足下、嚮者辱書、辭氣勤懇、望僕以所以得益、顧僕不肖、奚以當之、雖然、交遊之誼、默々不悉所思、亦何取焉、僕竊謂我三備乏人才、於往時則熊澤蕃山之於經濟、西山拙齋之於操守、菅茶山之於詩、近世則關藤藤陰之於德行、阪谷朗廬之於文章、皆一時之撰也、而足下伯父雪窓先生、曾問文於齋藤拙堂、又遊昌平黌、學問該博、著述等身、實爲諸先輩之後勁、今也先生沒已十餘年、三備之野不復聞有一人庶幾先生者、況能摩諸先輩之壘乎、三備人才之落寞、益莫甚乎今日焉、足下親爲先生甥、亦有與僕同其嘆者矣、雖然、是不獨三備也、夫方今文運昌盛、自海而內、讀書綴文之士、擾々何限、而其能庶幾古人者、果幾